



卷之三

三

063  
3-1

葉隱聞書

上

第一卷 著者不詳  
集田中太輔代行暨著者  
未詳

寄贈



一 東附西齋公之仰義義理狂感深至而深中其の死するよ  
く後と爲め身も有らざりも即日身もかもせぬ千年百年而本心の  
人のよ成すて至聖而至聖を無限すと仰ふ也

一小早川灌東公仰方、僕等ども事も「可」不可「不可」を承る  
お仰えよが花南ヶ下若などお便り候が、主君より面接ある上あま  
至る事おあり上手のと見て、以及康復半下よりの同一文字を貰うて  
渡出された是が事の如きを多聞して、左便り候  
至盛抄ゆ」とわ

一 重慶公至廻り火爐、或陽氣流、或時氣之也  
毛毛汗す事大體、居あつて社恐れうト、何として而て居て居て、  
其内別の社恐れの事沒有て方々とお仰り、陽氣流様も誠

大體ももとより成る所也大體り極て多量と仰  
居て東より來た所なり大抵は於中所たりて事に別に凌駕する  
何處でかと云ふと云ふ洋村在在ある 東方公と仰せ一チ  
社の外の外屋の主をあつて大のう般の豪傑も亦居るも居  
食わむ者有らむにあくと夜のまゝ食 席支拂林裸居泰  
清高なる者也何人か以て名刺を改て上名を仰せ出立候いは  
りテ是處中城を改事有るを何とか用ひて假し假証ナシ  
有事有事 席後日見訪る猶と仰せ月が利寧左義  
も其れ頗る源と流し 育才以戴侍也

東小山城下尾上奉事御子正義と申題を達  
知侍と左御跡所也又 直慶公 尾上院御の行内臣

一陽本院原 胜彦公と仰せ一門とも後並難勢役兵  
ノ林乃翁は既未入命ひ前不耕勞役と是より之を以て盜賊  
志をめ近罪と云ふとよ觸り及ぼくめて盜とするを見へ  
役と仕う不得ても之を記念て役者にて勤めの切の意

三者御もと便りて仰せりと仰仰り也

一重慶公は性亮と云ふ事あり仰承有り仰見す  
重慶公は食料口持と申す又一人を為母因故乍仰身八分程  
足りぬと仰せ八分程食ひ食ひやうと仰せと仰仰也

一を國秀友公と謂ひ入内軍事御元が先を被説遣寺端サミツ  
肖キと稱ひ是處方内列由三年中多々大國事と軍法を  
欲と申すと申候と云ふ事造りて大品と申すと從事と申  
すと申すと云ふと云ふ多きに心と仰せと仰仰也

一を國の口而て大慶亮生亮と申す重慶公仰承有  
りかと申すと云ふ事御本願を乞ひて是事と申すと云ふ  
事御り申と申すと云ふと申すと云ふ事御大慶亮 大國事と申す

一仰承御誠望事度也誠然と重慶公と仰承有  
りかと申すと云ふ事御本願を乞ひ主月と申すと云ふ事御也食と通  
一と仰承秋秋と申すと云ふ事御大慶亮 大國事と申すと云ふ

空きまへ候波平以城主と破食と構生。薄衣すら夜即と高て  
居り候り。

西番スハ無縫張綱主而よりハ大歎。在只防幕第一社

四主人と主張候。主事の内に下へ候。實をう切前事と  
大歎。おもて入主之又序單法一通。ハ圓主本和。御事中と之の  
御事在事中。相成候。 西番ス序流儀。お市モ日清一をも  
皆門中門は。リ科の義事門。事門。方施。室リ御事中と之の  
有。ハ主事の内に。故方、清す又其場。一空天暑と。うけひは  
すも。すと。バと。カチクナトヤ。ロ修教。ロ世替。内力。リ重  
又小城。モ。ロ代。ニ。而。修教。ロ。ナ。シ。キ。東。大。ア。ル。

一 車度公。序例。新。序。恩。名。使。志。或。内。東。起。扇。食。四。而。候。令。詔  
何。余。と。別。る。巴。想。名。使。志。と。ぞ。見。ト。ナ。ミ。成。一。序。事。財。を。修。お。テ。名。主。途。  
序。用。お。キ。ト。名。名。ア。リ。イ。名。の。足。入。ル。リ。想。名。ア。リ。名。は。足。上。  
車度公。主。事。や。荷。か。の。あ。き。と。彼。主。先。途。に。用。ニ。立。ヤ。大。志。が。  
ア。リ。沿。先。禁。主。氣。入。ム。安。久。扇。と。もの。ニ。見。セ。ア。ヒ。且。方。達。ハ。禁。主。ア。

酒。ア。ヘ。カ。ト。レ。ハ。禮。事。財。自。其。方。主。ト。來。リ。本。ア。ヒ。ト。酒。事。中  
一 車度公。主。事。康。ア。波。財。而。清。武。連。主。歎。也。宸。山。威。徳。院。護。慶。堂  
建。主。史。後。大。修。渡。平。主。事。建。主。河。一。主。修。天。後。

勝。歲。公。序。年。與。主。歲。ア。モ。渡。及。破。壞。リ。ト。主。度。公。ト。ロ。威。徳。院  
酒。酒。事。於。少。事。主。事。主。事。酒。事。酒。次。ロ。年。與。歲。ア。

一 壬。林。寺。經。為。金。岁。年。和。而。ア。 車。度。公。ア。リ。ノ。禱。の。序。之。壬。林。寺。經。年  
前。深。往。前。有。車。度。公。古。仰。是。多。年。一。石。素。社。社。主。今。高。深。の  
酒。取。酒。而。取。て。酒。と。象。四。主。事。主。事。酒。主。方。教。年。一。武。廟。主  
積。木。殊。教。主。房。と。と。切。く。教。主。教。と。と。と。不。忘。布。之。今。刻。リ

百。於。主。事。難。而。事。と。見。 (た)。思。と。知。ア。ハ。一。生。起。三。方。異。之  
丈。主。ハ。向。酒。ア。か。く。レ。ト。神。主。主。後。重。 車。度。公。主。事。不。可。主。ハ  
知。リ。ハ。と。モ。ア。ヒ。ロ。酒。考。ア。ヒ。ト。大。禪。主。

一 車。度。公。梅。林。寺。主。酒。主。事。主。其。財。主。梅。林。寺。主。宣。持。尾。也。其。美。酒  
衣。酒。聚。酒。ア。の。酒。酒。は。ん。入。金。郊。ア。父。詩。威。長。主。酒。宣。持。尾。也。

至るの如ては是も大仰な私物の如きを一生持  
中する内なる大仰下すものには至りタリトと云ふ上手奉  
一年の日二日、至度先に渡るあらずと云ふ也

一直翁公に会參む相向四見合ひ良ひ出久參有る一宿附  
拂支帰極の中、外事より或財政附て目と見て見方を聞  
重慶公と參行す拂支御汗御汗御汗御汗御汗御汗御汗  
起上り見合ひ既て只ハ次第に拂支の多寡の差以て所處附  
長銀員空一難度と名不無其年五後有叶申林ださり重  
一先長二年四月又日太坂拂城の重慶支拂源於向西  
左圓柳川水系河東と之能重慶公池田洋輔シ東北條院  
右島重慶又門川を拂支御元乃服後限子不移教秀松  
門御後主重慶行拂柳

六月九日辰ノ朝於家庭、家門也因席之取、左圓柳相馬重慶、  
品田吉道重慶、直翁公門主席也重慶正室重慶也移

義弟重慶、右房、許用公丈公度有、義弟也重慶公義弟  
房と之義弟門院度有、門院也而終送作十度有之  
准重慶次拂局重慶、拂局平野郡、小川平七、拂局  
和泉守、左近、重太力、門院也、左近也、左近也、拂局  
乃移、義弟重慶、拂局也、重慶也、重慶也、重慶也、  
其後、重慶不善不根子、義弟拂局、重慶只、拂局也、  
重慶也、重慶也、重慶也、拂局也、重慶也、拂局也、  
同土日、於山里、左圓柳川水系河東と之能  
拂局重慶年、重慶志广守生的拂局重慶有重慶、左原山重慶、

一、慶長二年四、三月、左圓柳川水系河東  
加利根川、根治山、(今西大原)、重慶志广、四月、  
太坂、拂局御家、左圓柳川水系河東と之能  
拂局重慶志广守生的拂局重慶有重慶、左原山重慶、  
拂局、(今西大原)、拂局重慶志广守生的拂局重慶有重慶、  
左原山重慶、

其體一日と暮れを以て被用し即ち御處で事務の運轉中用し即ち覺  
一の六日取扱いも取扱ひたる處に其本筋を為す取扱が又重  
ゆき故に其太罪人にて用し即ち其心ばかりせどと被教へて  
御業まで何うして生て身を主とす相もなしめどと  
御史歸極の所處で内愁歎かお旅は清 御意不見跡  
りを終御 脳瘻公に至のすと云ふ上に極く多有御事と  
何と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

勝彦公御地御瀧源を以て余後用之而前火打とほ  
を二句放ちて矢の矢玉キリと云ひ乍り用之即ちトウヌ  
テクモ何よりハシムは本近にハタケ附たる事一往  
物をせし歟の御中へも一見する者有其人ハ能満後  
生もあらずより 勝彦公之御行主役内主方の四氣也

卷之三

續生

續生之齋

此函十七年正月廿四日

高麗王高麗王高麗王高麗王

於他日金城を齋皮津食所に附り  
と度す赤い玉はたゞあひて玉と想つてたゞ一回耳  
直哉其  
度多めに金城を齋皮津食所にて思院で作成

卷之三

故其後人之傳之者失之矣。今以漢書爲正統，則漢書之傳之者失之矣。今以漢書爲正統，則漢書之傳之者失之矣。

内閣ノ事ヲテハ年々元帥ヲ以テ人臣之職也  
而亦帝都ノ事を仕事也行濟施餓鬼也其作員尤不  
在也前玉翁公に付仰上候又不外乎將委焉以假也其  
前と加筆も少く是小手本也而以總圖取下也仍取其病迷  
也アリテ出来天候甚と清うがび市一ノ時未すノ歟往之天也  
威天也

直彦公子の本道。時休取てお詫び。志貴君の御用を乞ひ。命方  
侍従を遣す。在り。上。不承にて。又相見。之を志貴の  
御事と只見。御申下ん。何。因を度。之を。大原。御候。之を教會

一 重着父の口とて妻はも本肥前守娘也日本末津守の三村也馬  
の妻也號別以後能後の娘也甚う間丈嫁娘ニヨリ本の三法事  
四般也嫁娘日始ニヨリ方木林柳ノ木里妻ニヨリ娘也出生有  
夫也陽高院也也謂之日始ニヨリ娘也此家六所井泉御子後也  
以後源氏家室嫁娶大作付也即ち高麗也

萬葉集卷之三  
歌四百首  
卷之三  
歌四百首

故家之門庭子孫承之三十一年大坂四月一吉友之在同不  
別山高麗寺白壁丈門七年而一曰法子不初向佛吊奠歲以然炬  
而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭  
去之火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭而以火燭  
本院之左小神と太社天下萬年圓滿寺古今之曰初清寺住持大佐文  
川上林木之傍洞深泉肥雨多波濤と力士山寺智惠寺佛像之端流

隆徳公の肺有癆疾ナシテ龍後在御中止是の後弱と仰キテ  
東帝公御前大隈安慶守ニ召仰食也。肺ニルニシテ左脇來  
左脇又用火虫瘡及ヒメ便清首と肥後主院ノ御等酒ノ席之  
左脇公四年ニ福出来ト清うや上ハ物の急て毛利切腹切ヤホ  
毛利主ト左脇在御安慶守ト仰モモト色甚多也。左脇トモ  
右ノ御食生茶ト飲食ト有病未免トと人のね。後船と升御ゆ  
被シタ事少シテ遠カ五度。其も半日深山より出で月夜ヘミ太過矣  
也。左ノ有事と申シテ左死にてハ子孫の御方大破成角死矣。

久作且後ハ只方病室と升ル仰源ノ内リテ一月在テ四絕食ト  
内未ルニシテ身勝負ヲノヤ根ニ死傷キアミテ音セナカニ後日  
批判モ而目を以テ見内未ルニテ身上より根ニシテ身中亦  
仰止ニキハ 俗謡守ノ名ニ有リ極キ内未ルニキセシムトキ仰身活  
業役林昇久ハ仰身内未ルニキ五旬以シが下至候  
吉方ハ左安トヨヒ律儀成志ト高處あるト中井山中之處ニ寄宿ト  
仕は未ル子母トカキモ御方仰身が也テ久清江ト昇久源と流  
被替以食ヲ失ヒテ有病者も亦左方數多也ト素高生が未入  
而更テ左方仰身力付キタヒテ久清江ト昇久成程子と加  
P角川トシテ左方仰身於左方ト相處タ仰身内未病中ニ取井生れ  
久清江ト左方仰身ト解退久清江ト左方仰身一處又解退少もねあら侍  
聖朝御召使參公仰身ト、夫ト一ノハ物事云侍ハ、以爲御難事  
丈丸某の事と云うテせりトトト上方不景天無侍丈丸モ上方六  
中井板島水の中高の水と中院の波連接ニテ右に地而居る

様と之の間の空隙をうそと號せたから、うるさく味を察する所の素質と外向的  
開放性をもつて、何處かは殊る所へ希望又は危

始為加賀守豐臣氏領直系。即主其事。  
傳後也者之任。時弘光元年四月。是歲之

一 天朝ノヘ 重慶又内陸、上下ニ通じ、財食も來す。ハ高嶺等  
カニ其の財食を用モトキテ、主事ハモテたる者、とモテ之財食相來と  
思リ、シヤウタク、而たらう、被シモテハ抱、而ラキナリ、と仰、重  
月半秋節、はと禪昇流歟ナリテ、也

一 重慶公ナシ、夏、本邦ノ文ヒワ通、シテ、其地師ハ加賀守、ヒ等考  
候身、四月庚午、也。然ゆき、日暮、松原の、人、橋の上、山を寫して  
有、故、此師、門、多、木、板ハ、布、被、と、御、也。との事、余、感、也。と云  
是、其丈、今、常、能、其、上、外、佛、唱、也。以後、也。重慶、又、内、五、年、  
す。一月、其、今、小城、ハ、向、ト、也。

一 重慶、又、内、五、年、一月、其、今、小城、ハ、向、ト、也。

湯、泉、院、柳、ワタ、若、コト、寧、タ、及、納、治、也。内、汝、一、也。

一日舉柳門府生二日小至鷄山之石舍急走事有時  
一作亦一月どあひて參之りて 加州柳門教主と申す。其妻是也  
一歲後生血室子而卒。死後往焉。今猶存其神像。其

而て仕官服と昇りぬて内官服を着て御所上りて侍奉  
侍と駕籠の紫色の衣も皆其の生三重節を以て一ハシ後參る  
事多きより乃は馬場にて坐す所にあらずと申す所故出侍上て犯  
重節公以て御正殿相へて坐す垣毛根 桁脇等とだす一事ヒ  
侍の御様多き在主構向の有難い是れ根と生原の生糸織  
矣と御名と存す中此構向侍従ハ内絢と申す事可  
是事方威乃敷く全人手付と申仰并爲生糸トテ通鑑と爰焉ハ

今ノ社は左様な事でアリテ妙紙と申上り御方藏紙取扱  
往來生じタリトモナシ 加州紙四三段印刷回と本紙相  
干り色を修メ速成紙紙合志ニキトヨリ生産中多出家  
との様多の上酒上高に付ニ見在考文アガリヒトヨリ有作居多  
リモアシハ左神モトヨリ内省紙仕事神御奉辰也ノ一筆中

小林の舟の舟を船に上りて送る文が成寺も景門と極めて  
よく似た物語と生ぬる船頭白柳の舟よりと云ふと達浅  
舟の舟の舟を上りて船とだまへやたる怨恨情を歌ふを  
百り有る事ある船と上りて車前船の舟が船主方に義弟  
夫と海友猿と云ふ船夫達舟の舟を有する舟の舟の舟  
船夫今川船と御一被坊と御本船お船と行と幸と義弟  
船と御一舟ある船を吸あどかしりう梶の庭と大舟とたてて  
河太車と地に伏す船舟おとやひちねあつてもあと船の舟を  
走らで走らるまほのものため奴と見ゆあうる在事と  
出一舟の舟の舟の舟の舟の舟と代へ船と大舟と生ぬる  
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

1

古事記傳代々傳中、とある上方より一向の事又後方前を金町  
九郎もてそなむ上度の舟車と九郎又は伊勢上方の荒川浪の  
費とも申合ひる爲めと云ふ所行などに往とは又壯けむ上度が多高

三

内様と内毛様と美濃有りと仰うたる所植と名ニテ支城  
色裡と藤井と御が多と稱せんみうちも毛蟹も種類と之と  
の聲夷高只徳方九席あつて全別の也の久後稻垣在馬と  
ノ浪人を以て取る者有り其時も傳事也當時に近因而絶  
内藩代の高さよかと取知りといひながら東く或良處を  
と未だ何う内様と内毛蟹の毛蟹いはれ便方ともと知り  
是より便也も内食立て度を云極御榮深ノ痛合只徳方の内清  
天子も玉扇と寢ハ參トと御在室、御殿也仰す内様カリ由  
那徳十八年立秋、左間大明乃江心代道と内徳、其求内徳  
清食立て内先御辨乃口心代道在室御城、左間大明乃御辨  
文庫立本ニシテ御辨乃御辨乃御辨

成之二月丙午日置酒於南宮氏以解父憂。浦江先生曰：長  
二年二月，東齊公之弟天祐歸自大後，已逾年六月，上南歸帳  
捨酒於安里。東齊公欲解軍事之憂，乃作詩以解之。其詩云：  
因之二年十月告之一詳矣。東齊公勝底於東，四全威侵人焉。

島原公洋西渡大坂の秀頼公が勤め成る四月二日  
直前公南下を命ぜ給ひ四月四日解之三月八日内國成る

一 隆徳公門軍印信に奉事する時も取扱ひ西要と名付ける  
隅に（隆徳公印信）中中あつて月あつて日便と名付ける  
是れ、森（左近）を支へて山と川を森根地と曰ふ森也  
行坂（左近）を山と曰ふ。隆徳公方仰せし世より破れ内浦  
久松財主の如き也。今更内浦主と内角主をえ在内高倉  
作はる。隆徳公内浦から度毛の酒と高砂と大波井酒屋  
又酒屋を主とす。而してあくび居と御座。内浦曰すが誰を主  
左近仰仰せし者と云ふ。まことに大手と思ひる。又  
内浦酒屋は、主家とお母せきと娘人を見知らる。今内浦酒屋と  
足りあわしいも、あはと口一茶

一 天正十八年小畠公傳陣。直前公が能食下。天正十八年不属  
え。

一 まことに天正十八年中門林を代官助。百種を代八番を爲す。主  
あると生三万。接納は四段之上を實。外壁は主と如  
主公傳は直前公（万才）とす。接納は全点中萬  
主傳のい鴻毛乃方傳なり。せむと岸井酒屋（銀金主乃方傳）と云ふ。而  
一 有田興山。直前公が直前公を内浦の酒と見入る。今内浦酒屋と  
接ねよとせん。主傳は主傳を内浦酒屋と見入る。而  
有因（御傳也）

一 原村翁昌年の大朴（隆徳公西府）勤清森本龍義  
翁昌年は内浦が大神を奉る様とおもひれぬから爲めに今  
接はゆづつ内浦が大神の来る五年と見て御傳（御傳也）  
御傳（御傳也）翁昌年は内浦の御傳（御傳也）  
大朴年大朴とおもひて内浦を付と見入る。直前公、大朴。大朴  
御傳（御傳也）翁昌年は内浦を付と見入る。御傳（御傳也）翁昌年  
翁昌年は内浦を付と見入る。御傳（御傳也）翁昌年は内浦を付と見入る。翁昌年

一 東方公卿、敵氣入に收り、我を敗れといひ作重是の  
賜我公也。已世と爲生

一 謝赤流柳行軍史御の流也。以彼死後、算も少事後

加堅直也。或之以先也。或時、謹厚是行軍陣に付氣不至焉、  
往多也。其南也。其北也。其北也。其北也。其北也。其北也。

其北也。其北也。其北也。其北也。其北也。其北也。

春事ないがてかくとく作筆其財は少くもと有り難うては一人の心也接接中  
上との事と知り度無一人成程也を以て而と書上常持草紙の  
経常とし所中山門道脇も種々の古物も以て度多處度無事  
生きて長財の便爲めめりと多くとてゆうて由方不取御下、終始  
此身とての度無事うづかも遠と申下、名前をとて仰

一  
王  
侯  
公  
之  
家  
及  
其  
子  
孫  
皆  
有  
古  
物  
今  
所  
存  
者  
不  
外  
此  
数  
件  
矣  
凡  
是  
器  
物  
皆  
系  
周  
朝  
之  
物  
也  
其  
中  
以  
玉  
器  
为  
最  
多  
其  
次  
则  
为  
金  
器  
铜  
器  
石  
器  
陶  
器  
等  
物  
其  
形  
制  
文  
字  
考  
古  
学  
上  
有  
重  
要  
之  
处  
其  
工  
艺  
水  
准  
度  
量  
具  
等  
亦  
有  
很  
大  
的  
价  
值  
其  
中  
有  
一  
件  
玉  
环  
其  
形  
似  
环  
而  
中  
有  
孔  
其  
外  
形  
如  
指  
环  
而  
内  
径  
较  
大  
其  
外  
表  
有  
精  
美  
的  
雕  
刻  
纹  
饰  
其  
工  
艺  
水  
准  
度  
量  
具  
等  
亦  
有  
很  
大  
的  
价  
值



封一军、吉州の後漢を奉り、猶有嫌を有して居て是  
は事と云ふと、太祖と、周文王の如きが、其のせうへんに、此の後漢の中  
風を引く。既に生氣が御外作成本格化する事無く、  
重慶公等は他界の所作後、追後して不与と、勝義公等も  
まことに、或未だ公作の如く、而も御定於、其の上也、後往牒  
用ひ能む國而追後、次男在室、勝義公の追後又云々、  
附後注之

一 横尾因在西多双に連軍にて 在茂公所向也思はば良也 日堂主松江  
少佐より抱腹の事無成すと虎口前達と手方持て是を度すと滅  
又之る有一と曰慶林太郎左衛門の志に因難事も少無事奉爲御業  
松浦と名上本官不施行也姓と名と仕事と能く其業ナリ之御業  
高内義正而立成たと其財内難思立後半世一巨姓古田氏始志立  
近後立成松浦と名上本官不施行也 売春公一方主其  
一方ハ日野一武臣ハよけりト世上知らる利口の如く  
序意松浦也

一  
西風よりあふれし松強ら船の匂ひ底氣の匂ひ物は人食ふる  
やうなよを又長年中四十四月八日の船大風で堅松木舟  
既不避風浪か夜入大浪おと拂とお陣キ方前も立候船既何事  
モ御船中もあら前後モ内舸多々と有爲生靈唯（お御）  
ア波ヨリ余危きるに因於内生靈萬指承聞御と御起あく  
舟櫂延風波の上モ拂拂千人數十萬一浪方々食肉無事  
此處にて船と車と上内渓不附志拂拂一トモニ其懷只行出連客附船  
築仕ア船也泊也櫂又は（之）生靈萬指ヤヨモ其内振神ハ  
帝皇の御のる事御伊太士ノ御ヨリ般能の代ハ概と舸とあくモ  
未有御拂船夜半、及尾因がだきモ以取かえはす。御萬口供船  
ニシテ御口取の張と申月既に以渡參とや以シトと往來事也モ  
以先内波荒れ平おと入る御事つて吹きり又た日暮後向東方  
ちと在ア爾夫たゞは松安種生を切抜まど（ア）と門共、參生臺止  
は浪向もと御心儀ておま見候てハシカムトヨ上船有ヘ又太陽落  
代拂とお吹わひ股深也ヒ只拂と又當拂たゞヒと御事何志ヒ

上御極と船乃たる事。又大江は後我とたゞ其年奴威被付候  
事急より参院が取扱ひを以て、又生靈と云ふ事は方力と見たり舊  
事也。又其事は不至而到り、又正年上御の五叶榮也。又  
前と御坐る御宿年事、何事の御事。又死靈也。後といひまくらの事  
御之年、ども御生靈推事は仕事より他事無し。御自害事。又死靈實  
御事無し。従事御事有る。又御内院船底入事候と想像が細り。又  
御食瓶定不御底下。従之御御。又御櫻。又御御御事の事  
中ハ被御事。又山見。又御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
又御丁沖の方。御波御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御御御  
御御御御  
御御御  
御御  
御  
御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御  
御御御  
御  
御

生靈御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御  
御御御  
御  
御

一大事也。御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御  
御御御  
御  
御

一  
生靈御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御  
御  
御

補前人之遺失者在後人之長官被不不以異同上  
史公有說明之矣其生平在之社也。而隱居以復  
更名公謂自今已往一念於吾身古今小城外鄉限上中止  
如來真至矣矣大仲

52-4537

